

〔特集〕 発達と集団と活動

特集にあたって

高橋 智

発達保障を進めていくうえで集団と活動という視点は重要である。例えば、個の発達は集団の発達と不可分であることや、発達は主体的・能動的活動を通して進むことなどである。「発達・集団・活動」の視点は、「障害・発達・生活」の視点と並んで発達保障の中核的内容と考えられるが、しかしこれまで「発達・集団・活動」という三者の関係についての理論的整理は必ずしも十分ではなく、本誌でも「発達と集団と活動」という特集は今回が最初である。

さて、現在の特別支援教育や就学前の療育・保育、放課後等デイサービスの一部においては、「個別」指導による学習の積み重ねで「できる」ことが増えることをただちに「発達」とみなしたり、「活動」の文脈があいまいな中で本人の気持ちやねがいを確かめないままに一方的な反復指導がなされたり、まるで「個別指導塾」のような運営がなされ、子どもの発達を視野に入れた取り組みになっているのか疑問なところもある。

こうした現状を鑑み、「発達・集団・活動」という三者の関係を整理し、発達保障における「発達・集団・活動」の意義をあらためて丁寧に検証する特集を企画した。

西川氏は、子どもの自発的あそびの検討を通して、発達における集団的コミュニケーションや主体的・能動的活動などの重要性について心理学的視点から論じている。

三木氏は、集団の教育的価値を重視した授業実践の検討を通して、発達における集団や活動の意

味を教育学的に論じている。

中村氏は、発達保障論の形成における「個人の系」「集団の系」「社会の系」の関係性などについて歴史的に検討している。

新井・土屋・久保・岡野氏は仙台市なのはなホームの実践を通して、「子ども集団」を視점에療育を振り返る中で、「仲間の中でこそねがいが生まれる」「仲間に認められることの大切さ」「自分で決める力をはぐくむ」ことの発達の意義を明らかにしている。

木澤氏は、特別支援学校の「朝の会」の取り組みを通して「友達がいて、先生がいて、楽しいことがあって、みんなでするから余計に楽しく」「人と人とのつながり・共に感じ響き合う心地よさが『授業づくり』の土台である」など、教育実践における「発達・集団・活動」の意義と役割を明らかにしている。

阿利氏は、放課後等デイサービスの自由遊びの実践から「遊びを通して子ども同士の関係の広がり」と深まりを見せ、主体的な遊びは様々な変化を見せてくれる」ことを明らかにしている。

福元・新屋氏は、「重度障害があっても集団があるから『働ける』」など「利用者のゆたかな成人期の生活を創り出すための『しごと』の意味」を、地域活動支援センターにおける集団づくりの実践を通して明らかにしている。

本特集が「発達・集団・活動」の実践と発達保障論の深化発展につながることに期待したい。

(東京学芸大学 たかはし さとる)